

2020年(令和2年)3月23日

病院長からの一言 退任にあたって「感謝！」

弘前大学医学部
附属病院長 福田 眞作



3月末日をもって附属病院長を退任することとなりました。平成28年就任以来4年間にわたりご支援いただいた全ての教職員に衷心より感謝申し上げます。

就任するにあたって(密かに)掲げた目標がありました。将来にわたって専門的で高度な医療を提供し続けるためには避けて通れない病院施設の再整備計画をスタートさせること、職場環境の改善(職員の意欲、満足度の向上)、病院経営の改善(老朽化した医療機器更新への投資)、新専門医制度への対応、そして津軽地域における中核病院構想の実現です。皆様のご協力・ご尽力によって、職場環境の改善については疑問符がつくものの、概ね達成できたのでは…とっていますが、いかがでしょうか？

各診療科・各部門の皆さんの日々の診療に対する意欲の向上を年々実感でき、必然的に各科の診療指標が改善に向かいました。事務部門が、その現場の頑張りを着実に診療報酬増、病院収入増に繋げてくれました。このような実績の積み重ねによって、いまだ不十分ながらも職員の増員が可能とな

り、遅れていた医療機器の更新や新規医療機器(ハイブリッド手術室など)の導入も実現できました。

多くの専攻医が本学およびその関連施設で専門研修を開始したこと(平成21年27名、平成29年60名と倍増)によって、本学の地域枠入試の成果が明確に示されました。しかしながら、圏域全体の医師不足の解消にはまだまだ多くの課題が残されています。地域枠制度が地域の医師解消にむけて有効に機能するような各診療科の取り組みを期待しています。

毎年1回、各部署の巡回で現場の(悲鳴に近い)声を聞かせていただき、勤勉な職員の日々の犠牲のうえに本院の経営が成り立っていることを実感しました。働きやすい環境作りを重要目標の一つとして取り組んできましたが、いまだ道半ばです。このことは次期病院長に託したいと思っています。

最後に、次期病院長を中心に全職員が結束し、病院を取り巻く環境が厳しくなる中であっても、附属病院が更なる発展を遂げられますことを心から願い、退任の挨拶といたします。

各診療科等の紹介 【眼科】

眼科は、眼球とそれを取り囲む周囲の組織を対象とする臨床科です。人間は外界の情報の80%を五感のうちでも視覚によって入手しているため、眼球は感覚器官としてとても重要な働きをしています。そのため、眼科の病気によって視覚障害をきたした患者さんの苦痛や不安は大変なもので、逆に治療によって回復した時に見せる喜びの笑顔に医療スタッフとしてのやり甲斐を実感できる診療科でもあります。眼科の守備範囲は一見狭いと感じられるかもしれませんが、他の診療科同様幅広いものがあり、外眼部疾患、角膜などの前眼部疾患、緑内障、白内障、ぶどう膜炎、網膜硝子体疾患、神経眼科、各種腫瘍性疾患などを取り扱っています。眼球に対する手術治療では白内障、緑内障、角膜移植に加えて各種網膜疾患に対して行う硝子体切除手術、斜視手術および腫瘍性疾患がその多くを占めています。このうち硝子体切除手術では最近技術革新がみられました。第1は、手術用顕微鏡に光干渉層計を装着して切除すべき膜状組織とその裏面にある温存すべき網膜組織との立体関係を術中リアルタイムで把握できるようになったことです。第2に手術用3Dモニターを導入です。従来から術者は手術用顕微鏡を覗きながら手術に集中していましたが、長年続けますとこれが腰痛や眼精疲労の原因となっていました。両眼の顕微鏡接眼部に専用カメラを装着することで4Kの立体画像としてモニターに投影できて、術者は楽



な姿勢(heads-up surgery)で手術が可能となった他、看護師や若手医師、実習の学生も術者と同様に眼球内を立体的に観察できるようになりました。カメラも高感度ですので眼内照明も低くできるため網膜への光傷害を最小限にできると、術者にも優しい手術と周囲スタッフの教育効果の向上が得られるようになりました。実習の学生からは「眼の中は小宇宙の

ようだった。」という感想も聞かれますが、これが眼科志望者の増加に少しでも役立てばと考えています。なお、定期手術はすでに数か月先まで埋まっているため、網膜剥離に対してはほぼ臨時手術で対応するしかなく、手術部には大変お世話になっておりこの場をお借りして感謝申し上げます。

(眼科 中澤 満)

第50回日本消化吸収学会 学会賞、 学会賞候補演題(会長賞)を受賞して



○学会賞候補演題(会長賞)を受賞して

令和元年10月5日に羽田空港国内第1旅客ターミナル、ギャラクシーホールにて第50回日本消化吸収学会が開催され学会賞候補演題(会長賞)を受賞しました。演題名は「食事調査は消化吸収試験の予備段階として意味があるのか?」で胃がん術後患者の栄養アセスメントについて発表しました。今まで参加してきた学会とは違い、医師が多く参加する学会で発表するのは初めてでしたが、とても貴重な経験であり、勉強になりました。今後も患者の栄養改善のため日々努力していきたいと思えます。学会賞受賞にしまして消化器外科上部グループの先生方、栄養管理部のスタッフ、ご指導してくださった先生方に感謝申し上げます。(栄養管理部 嶋崎真樹子)

○学会賞(味の素賞)を受賞して

このたび、論文「臍頭十二指腸切除術後の食事摂取状況の現状」で第50回日本消化吸収学会味の素賞をいただきました。臍頭十二指腸切除術後の患者は食欲不振等から経口栄養摂取量が少ないことが多く、食事や補食の調整をしています。論文ではNST(栄養サポートチーム)での介入症例をまとめ、術後に低下した栄養摂取量は退院後約三か月で入院前と同程度になりますが低栄養は遷延することがわかりました。今回の結果を念頭に置き、患者の低栄養改善やQOL向上の一助となるよう、栄養士としての役割を精一杯務めさせていただきます。いつもご指導くださるNSTチーム長の柳町先生、NSTの先生方・栄養士の皆様、消化器外科の石戸先生並びに同チームの先生方に感謝申し上げます。(栄養管理部 横山麻美)

新病棟整備安全祈願祭

新病棟整備については、医学部附属病院にて計画を取りまとめ、教育施設研究所・総合設備計画設計共同体が設計を進めて参りましたが、この度ようやく着工の運びとなり、令和2年1月24日に建設予定地に安全祈願祭を実施しました。安全祈願祭は工事が安全かつ速やかに終わるように、その土地の神様をお祀りする儀式であり、鹿島建設株式会社、ユアテック・振興特定建設工事共同企業体、株式会社朝日工業社(施工業者)の主催により執り行われました。

学内からは、佐藤学長、福田病院長、渡邊理事、若林大学院医学研究科長のほか新病棟設計に携わった関係者らが出席しました。鉄入れの儀で

は、計画・設計代表として福田病院長が盛砂の草を鎌で刈り取り、続いて施工代表として鹿島建設株式会社が鋤で土をすくう所作をそれぞれ「エイ、エイ、エイ」の威勢の良い掛け声とともに行いました。その後、玉串奉奠、学長等の挨拶を経て、季節外れのお清めの雨に見守られながら全ての神事が滞りなく終了しま

した。これより本格的に工事が始まり、関係者・病院施設利用者含めました皆様へもご尽力・ご協力をお願いすることになります。工事の安全と建物の無事完成を願いつつ、3年余りの長期に渡る工事期間ではありますが、新病棟の完成を楽しみにお待ちしております。(施設環境部)



福田病院長の刈り取り(斎鎌)



佐藤学長の土掘り(斎鋤)

令和2年1月24日、附属病院病棟新営その他工事の安全祈願祭が執り行われ、新病棟建設工事が開始された。

病棟の整備計画は、平成24年から検討され、私が赴任する平成28年には、平成29年度概算要求に向けて文部科学省に提出されていましたが、惜しくも採択されず、再度検討し直し、平成31年度概算要求で採択された経緯があり、とても感慨深い神事でした。これから順次病棟等が整備され、

患者にとってはもちろんのこと、職員の皆様の勤務環境の改善になればと願っています。

また、今、病院では医師のみならず、病院職員全体の働き方改革が課題となっています。地域医療の最後の砦としての大学病院であり労働時間が長くなっていますが、個々の職員の勤務時間を適切に把握し、業務なのか自己研鑽なのかをはっきりさせることが、この働き方改革を遂行させるための第一歩だと思えます。その上で、

先憂後楽

弘前で四年



事務部長 川村金蔵

タスクシフト/シェアリングを全職種が一体となって実施していく必要があると思います。皆様の協力がなければできないことですので、よろしく願います。

最後に、私事ではありますが、この3月で定年を迎え、4年間いた弘前大学を去ることになりました。病院の病棟整備計画に関わり概算要求が認可されたこと、病院収入が200億円突破し記念祝賀会を開催したこと、病院長杯ボウリング大会に参加したこと、ねぶ

たまつりに参加したこと、一部の方々にはなりますが釣りに行ったこと、病院長の許可を得て全国国立大学病院事務部長会議総務委員会の医療訴訟研修会の座長をやらせていただいたこと等、たくさん思い出を作らせていただきました。福田病院長をはじめたくさんの方々にご指導ご支援をいただきありがとうございます。この場をお借りし感謝申し上げます。ありがとうございます。

新型インフルエンザ発生時対応実動訓練を実施



弘前保健所からの連絡等初期対応の確認、実際の搬送から受入訓練を行いました。搬送経路については、他患者との接触もなくスムーズに行えました。しかし、病院搬送入口に段差があり、軽症患者の場合は受入可能と思われましたが、ストレッチャーが必要な重症者については別の搬送経路を考慮しておく必要があると考えられました。病室の準備については、感染症病床の空調を遮断するために、目張りを実施(8か所)する必要が

あり、事前に準備された状態でも1時間強かかりました。病室前には簡易陰圧装置である空気隔離ユニットを設置しました。搬送・設置自体は30分程度で行えました。受け入れする診療体制について、呼吸器内科、感染症科、救急科医師が参加してくださいました。ありがとうございました。特に問題はないと思われましたが、バックアップ体制はさらに検討が必要と考えられます。今後とも感染制御センターへのご協力をよろしく申し上げます。

(感染制御センター 副センター長 齋藤紀夫)

夜勤帯のユニフォーム導入

働き方改革の取り組みの一環として、どちらの時間帯に働く看護師が視覚的にわかる・仕事の効率化の意識改革・時間外勤務時間の減少などの効果を期待し、令和2年1月1日から夜勤帯に専用のユニフォームを導入しました。入眠を促す暖色系のオレンジ色を基本に、機能的で動きやすいスクラブタイプ(男女兼用)を採用しました。夜勤のユニフォームの色を変えたことをひとつの足がかりとして、今後も、一人ひとりの労働生産性を高め、業務改善を行いながら、患者さんへ思いやりのある看護を



提供し、働きがいのある職場づくりに努めていきたいと思っております。(看護部)

内視鏡の先端保護による修理費の節約と啓発

臨床試験管理センター 海老名麻美 光学医療診療部 三上達也、石郷直子 消化器内科、血液内科、膠原病内科 澤谷 学 消化器血液内科学講座 菊池英純、立田哲也、櫻庭裕文
地域医療学講座 珍田 大輔 大館・北秋田地域医療推進学講座 平賀寛人 看護部(放射線部) 若谷兼子、藤田美代子、佐波美奈子、岩崎洋子、成田節子、高杉生野、佐々木淑恵、中田哲子、佐藤知佳、阿保真貴子、奈良更紗、櫻庭詩歩、山口るり子、伊藤賢津子、後藤真由美、平鍋真理子、榎方米子

○診療技術賞を受賞して 代表 臨床試験管理センター 臨床工学技士 海老名麻美

この度は、名誉ある第22回弘前大学医学部附属病院診療奨励賞を頂き、誠にありがとうございました。大変光栄であり、幸甚に存じます。病院長先生ならびに選考委員の諸先生方、関係者の方々へ心より御礼申し上げます。今回の主題は『内視鏡の先端保護による修理費の節約と啓発』です。本院光学医療診療部では内視鏡の修理費はこれまで、年間約300万円かかっていました。故障回数も多く、修理から戻ってきたかと思えば、入れ違いで他の内視鏡が修理に出るといったような状況でした。不具合や故障の多さは、検

査や治療の遅延に繋がることもあり、トラブルの少ない安定した検査・治療の出来る環境整備ができていないかと頭を悩ませておりました。故障内容を精査すると、使用頻度の高さなどによる劣化で気を付けていても避けられない故障もありましたが、レンズや内視鏡先端部分をぶつける・落とすなどの普段の些細な取り扱いを見直すことで避けることができる故障が大半を占めていることがわかりました。そこで、保管庫から内視鏡を持ち出す際は、先端に保護チューブを装着し、洗浄時も洗浄機へセットするまで装着することを徹底しました。またポスターを作成し、内視鏡を使用する医師への取り扱いに関する啓発活動、洗浄担当スタッフなどへの定期的な勉強会を開催し、内視鏡の扱い方を見直し



室(代表栗津朱美 他10名)の「外来化学療法室におけるホスピタリティマインド〜メッセージカードを通じた心のつながり〜」が受賞しました。また、授賞式に引き続き祝賀会が同センター内で和やかに行われました。(総務課)

前立腺がんに対するシード線源永久挿入療法のチーム医療体制の確立

放射線治療科 放射線腫瘍学講座 放射線部 泌尿器科 泌尿器科学講座 看護部(RI病棟) 佐藤まり子、藤岡一太郎、川口英夫 畑山佳臣、駒井史雄、今井 篤 橋本安弘 齋藤あゆみ、繁田淑子、木村尚子、秋田晶子

○診療技術賞を受賞して 代表 放射線治療科 助教 佐藤まり子

第22回弘前大学医学部附属病院診療奨励賞(診療技術賞)を賜り、大変光栄に存じます。残念な

が、針挿入の工夫や連結シードの導入、ホルモン療法や外部照射との併用等により、中間・高リスクの前立腺がんに対しても適応拡大を図りました。現在までに260例を超える症例に対して本治療を行い、良好な治療成績を収めるに至りましたが、診療放射線技師やRI病棟の看護師の協力のもと、放射線治療科と泌尿器科の密な連携により、チーム医療体制が確立・機能したことが本治療法の成功に繋がったものと考えております。さらに最近では、直腸の線量を目的として前立腺と直腸の間にスパーサーを留置して治療を行う方法も導入したところであり、患者さんが安心して治療を受けられるように日々工夫を続けております。今後もチーム一丸となってシード治療の普及、改善に努めて参りますので、御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。最後に、本治療の発展に御協力いただいているスタッフの皆様にご場をお借りして感謝申し上げます。

から私自身は授賞式へ出席することが叶いませんでしたが、受賞報告と「前立腺がんに対するシード線源永久挿入療法のチーム医療体制の確立」に関する取り組みについて御紹介いたします。前立腺がんに対するシード線源永久挿入療法は2003年に我が国に導入された治療技術であり、限局性前立腺癌に対する根治的治療法として注目されております。本治療は、会陰部から針を通じて50~80個ほどのシード線源を前立腺内に留置し、有害事象の観点から外部照射では照射不可能な大量の放射線を安全に照射することのできる放射線治療法です。治療時間は1.5~2時間程度で全身麻酔不要であり、3泊4日の入院後はすぐに社会復帰が可能です。弘前大学医学部附属病院では2006年より導入の準備を進め、2007年に青森県初の治療施設として認可を受けました。当初は低リスクの限局性前立腺がんが本治療の良い適応とされておりました

英語版ホームページを公開



弘前大学医学部附属病院では、これまで、院内で配布している外来案内と入院案内の多言語化を図る等、外国人患者の受け入れ体制を整備してまいりましたが、このたび令和2年1月に、新たに英語版のホームページを公開しました。外国人患者が、より見やすく、より快適にご利用いただけるように、パソコン、タブレット端末、スマートフォンの幅広い端末に対応したWEBサイトとなっております。また、英語版ホームページの公開に伴い、日本語版もリニューアルいたしましたので、こちらもご利用願います。今後とも本院ホームページをどうぞよろしくお願い申し上げます。(総務課)

外来化学療法室におけるホスピタリティマインド〜メッセージカードを通じた心のつながり〜

看護部(外来化学療法室) 栗津朱美、阿保恵美子、大湯香織、福井朝子、木田 歩、齋藤まり子、村上裕子 看護部(放射線部) 平鍋真理子 医療事務 奈良世子 外来化学療法室 水島泰子

○心のふれあい賞を受賞して 代表 看護部(外来化学療法室) 看護師 栗津朱美

この度は、弘前大学医学部附属病院診療奨励賞心のふれあい賞を頂き、誠にありがとうございました。病院長ならびに選考委員の先生方、関係者の方々へ心より御礼申し上げます。近年、新規抗がん薬の開発、支持療法薬の進歩、診療報酬制度改定による在院日数の短縮などにより、治療の場が外来へ移行しつつあり通院治療をするがん患者数が

増加しています。外来化学療法を受けるがん患者は、それまでの生活を継続しながら治療を受けることができる一方で、病状の進行に関する心理的負担や、副作用に伴う日常生活の制限、治療による時間的拘束や経済的負担、職場や家庭での役割遂行などの困難があります。外来化学療法は、患者と関わる時間が短いことや、副作用が帰宅後に出現するという特徴があります。そのため、私たちは短時間の関わりを積み重ねて関係を構築し、帰宅後の生活を予測しながら、患者が生活の中で大切にしていることを支える看護を心がけています。また患者や家族が思いを表出する場を作りたい、辛いながらも笑顔忘れ

ず少しでも明るい気持ちになってほしいと考えています。治療当日が、誕生日の場合やバレンタインデーやクリスマスなどの季節の行事には、手作りのメッセージカードとささやかなプレゼントを贈り、スタッフとともに喜びを共有できるよう声掛けを行っています。「歳をとると自分の誕生日なんて自分も家族も忘れていた。特に病気になる前は、病気のことで頭がいっぱいだったのでうれしかったな。」という言葉をいただくなど、思いがけない心情を表出するきっかけになっていると感じています。そして患者、家族、スタッフで喜びを共有するという関係が、信頼関係の構築につながっているのではないかと考えています。

今回の受賞を励みとし、スタッフ一丸となり、より一層患者・家族への看護の質の向上を目指していきたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

【編集後記】

南塘だより97号をご覧いただきありがとうございます。ご多忙のところ、原稿をお寄せくださった皆様には心より感謝申し上げます。令和2年となってから、いわゆるコロナウイルスによる新型コロナウイルスが世界的な流行を見せてきております。本編集後記作成時点では、青森県内での患者は確認されていませんが、近くでは北海道で複数の患者が確認されているようです。通院患者さんの中にも、自分の症状はコロナウイルスによるものではないかと心配される方も多く存じます。特に出張の多い職員の方も同様ではないでしょうか。コロナウイルスへの効果のほどについては肯定的否定的報道も様々ありますが、他の感染予防という意味もありますので、今一度基本的な感染予防に努めていきましょう。(病院広報委員会 神経科精神科 富田 哲)

弘前大学医学部附属病院へのご寄附、心より御礼申し上げます
ご氏名の掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。今号では、令和元年11月から令和2年1月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。(経理調達課)

寄附者ご芳名
石澤 誠 様 森山 裕三 様